

山形県、尾花沢スイカの産地形成

齋藤 功

I. はじめに

農業地理学的にみると大都市で消費される野菜類は、近郊農業地域、暖地性輸送園芸地域、高冷地性輸送園芸地域から供給される。しかし、このような産地形態が残存しつつも、野菜類は価格の良い端境期をねらい施設化によって早期に出荷する傾向がある。この前進栽培の傾向は、根・葉菜類より果菜類で強い。周知のように夏の味覚の王者スイカはメロンとともに果物と同様に扱われるので果菜類の代表といえよう。

東京市場におけるスイカは、1・2・3月の高知、沖縄ものに始まり、4・5・6月の熊本もの、6・7月の千葉、茨城もの、7・8月の神奈川もの、8・9月の山形・青森もので終わる¹⁾。アフリカサバナを起源とするスイカは、本来、日本の暖温帯という自然状態では神奈川の三浦半島のように8月に収穫されるものであった。したがって、千葉、茨城産のスイカはビニール・ハウスや大型トンネルを使用して促成栽培されたものである。さらに、気候の温暖な熊本県の植木スイカは前進栽培の最たるもので加温ハウスなどの施設化によって産地形成されたという²⁾。

ところが、山形県や青森県におけるスイカの栽培は、気候の涼しいブナ帯（冷温帯）という環境を活用したものとみることができる³⁾。かつて、木造町を中心とした青森県の屏風山スイカは、そのみずみずしさと甘さで盆過ぎの東京市場で独占的地位を占めていたが、山形産のスイカにその地位を奪われつつある。山形県におけるスイカ産地

は内陸部の尾花沢市を中心に形成されている。本稿では山形県におけるこの新しいスイカ産地の形成過程、形成要因および生産構造を明らかにすることを目的とした。

調査対象地域は、広義の山形盆地の北部をなす尾花沢地区である。ここで尾花沢地区とは便宜的に尾花沢市、大石田町、村山市とする。なお、尾花沢市は北村山郡に属した尾花沢町、福原村、宮沢村、玉野村、常盤村、が合併して1969年成立した市で、1985年の人口は24,801人であった。なお尾花沢市、大石田町を含めて尾花沢盆地ということもあるので、尾花沢スイカと言った場合、前記2市1町を含めて使用する。

II. 尾花沢地区におけるスイカ栽培の発展と産地変動

II-1. 尾花沢地区におけるスイカ栽培の展開

山形県統計書によれば1925（大正14）年福原村では15haのスイカが栽培されていた。また、1928年尾花沢でスイカ生産組合が結成されたという⁴⁾。その一端は、1932年福原村のスイカ作付面積が5.5haとなり、代わって尾花沢町、常盤村のそれぞれ12ha栽培されていたことに認められる。この統計書を詳細にみると現尾花沢市域ではスイカの栽培面積が増大しており、若干の産地変動があったことが読みとれる。つまり、スイカの小商品生産が始まっていたのである。ところが、奢侈作物としてのスイカは、1941年から1949年まで作付統制を受けることになった。その名残は現在でもスイカ・メロン等が農林省の野菜指定産地の除外

作物であることに示されている。

戦後、尾花沢のスイカ栽培は復活し、1956年に19.95haのスイカが収穫されていた。連作をきらうスイカの直播栽培では、面積が20-30haに限定されていたのであろう。ところが、翌年蒔袋開拓で連作障害に強いスイカ接木苗が導入され、これが各地に普及するようになり、スイカの栽培面積を増大させて行った。1960年には尾花沢市蒔袋開拓でスイカ生産組合が組織されるまでになった。しかし、当時においては伝統的な畑作である雑穀、養蚕および新しく導入された商品作物であるタバコ、ホップ等にも根強い執着があり、スイカ栽培面積は急激に増大したものではなかった。

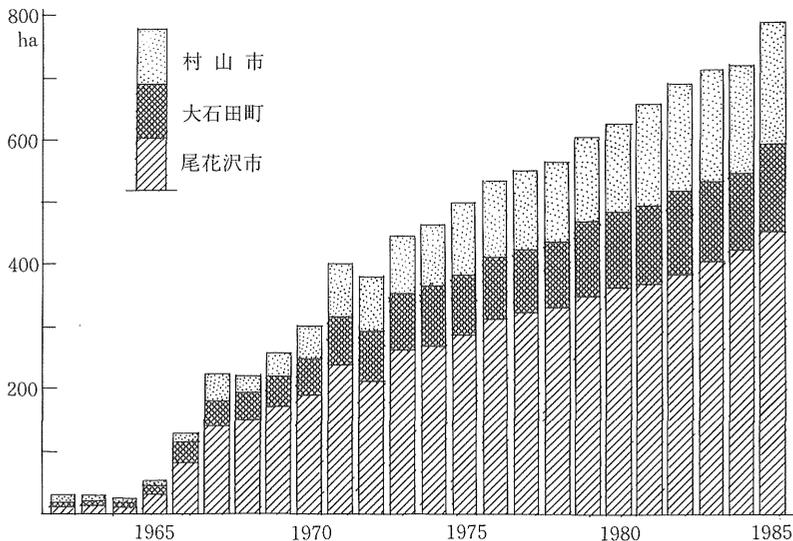
スイカ栽培面積が急激に増大したのは第1図に示したように1960年代後半に入ってからである。すなわち、1965年前後大豆、菜種の価格低下によりスイカへの転換が進み、各地にスイカ生産組合が組織されたのである。これに対応するため1966年旧町村単位の尾花沢、福原、宮沢第1・宮沢中央、玉野、常盤の6農業協同組合が尾花沢市農業協同組合に再編され、尾花沢市で生産されたスイカを「花笠西瓜」、大石田町のそれを「べにばな

西瓜」とし、共販率を高めることにした。それと同時にスイカ栽培指導員を採用し、栽培技術の向上に努めた。翌年には野菜ハウスを補助事業で設置し、接木苗木の生産にのりだした。このような施策により、品質の優れた統一品種のスイカの共販が進展し、生産者も良い価格を享受できるようになった。

1970年に始まった米の生産調整によりスイカ栽培面積が増加するようになった。1971年村山北部広域団地に指定され、尾花沢市・大石田町・村山市のスイカ栽培に対して技術指導や共同出荷の協力体制ができ、村山市のそれを「基点西瓜」とした。1975年大石田町新山寺で開発されたトンネル多蔓栽培と秋マルチが普及し⁵⁾、スイカ栽培面積は増大し続けた(第1図)。1985年には尾花沢市のスイカ栽培面積だけで、455ha、10億円の売り上げをあげるまでになった。

II-2. 山形県におけるスイカ産地の変動

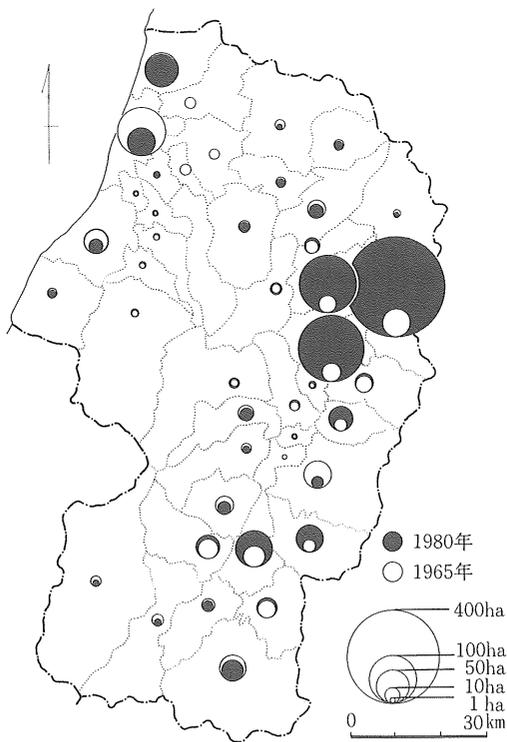
このような北村山地区におけるスイカ栽培の発展によって山形県内のスイカ産地がどのようなようになったかをここで一瞥しよう。1965年と1985年の市



第1図：尾花沢地区におけるスイカ栽培面積の推移
資料：山形県農林水産年報（1962-1985）

町村別スイカ栽培面積を比較した第2図をみれば、庄内砂丘から内陸盆地へというスイカ産地の移動が明らかである。すなわち、1965年においては、酒田市(110ha)、遊佐町(52ha)、鶴岡市(24ha)からなる庄内砂丘地区に中心があり、尾花沢市は30haにすぎなかった。

しかし、その後、酒田市のスイカ栽培面積は1967年の128ha、1971年の152haとピークを迎え増大したにも拘らず、尾花沢市の同年のそれがそれぞれ142ha、240haと急激に増大したので、首位の座が内陸盆地に移ったのである。1985年になると酒田市のスイカ栽培面積は、34haとなり大きく減少した。一方、尾花沢市、村山市、大石田町のそれはそれぞれ455、144haと増大し、山形県の68.4%を占めるまでになった。つまり、スイカの産地は完全に庄内砂丘から内陸の尾花沢盆地へ移動したとみることができる。



第2図：山形県における市町村別スイカ栽培面積の変化(1965～1980)

資料：山形県農林水産年報(1965-1985)

この間、庄内砂丘ではスイカからプリンメロン等への移行が進行したのである⁶⁾。その一端は1985年における酒田市、鶴岡市、遊佐町のメロン栽培面積がそれぞれ212、130、98haに達し、山形県におけるメロン栽培面積の72.8%を占めていることからわかる。しかも、現地ではマスクメロンやアムスメロンなど高級品種への移行もみとめられた。

III. スイカ産地の形成要因

III-1. 共販体制の確立

a) 東京市場における山形スイカの地位の向上
前述のように尾花沢地区におけるスイカ栽培面積の増大および共販体制の強化によって東京市場における山形スイカのシェアが向上した。山形県のスイカが東京市場において重要性を帯びてくるのは、1970年代である。すなわち、1965年に495haであった山形県のスイカ栽培面積は、1970年には833ha、1975年には1,020haとなった。第1表に示したように8月の東京市場における山形県スイカの地位は、1970年の1.7%から1975、1980年の16.2%、37.0%を経て1985年には58.9%となった。つまり、需要量の少ない9月のシェアは青森県に及ばないものの、8月のそれは1976年には青森県を凌駕し、8月出荷のスイカの産地を確立したのである。

この産地形成の背景には尾花沢市農業協同組合ばかりでなく、大石田町、村山市などの農協と協力して1970年スイカ出荷協議会を結成し、スイカ栽培技術、品質向上の協定をなしたことがあげられよう。共販体制の確立は、農協による接木苗の育苗・配布とともに山形スイカの地位を高めたのである。一方、東京市場において遅出しの屏風山スイカで知られていた青森スイカは、その産地が七里長浜という砂丘地条件に加え、低温障害による果実の変形等が重なり、庄内砂丘と同様メロン産地への転換を余儀なくされた。

内陸盆地にある尾花沢地区は冷温帯にあっても青森の屏風山地区より温暖である。また、山形県においては桑園が多く残存し⁷⁾、かつ雑穀栽培に

第1表 東京市場における山形スイカのシェアの変化

年	8 月		9 月	
	山形県	青森県	山形県	青森県
1970	2,196 (1.7)	1,492 (3.3)	1 (0.0)	444 (58.4)
1975	6,327 (16.2)	8,813 (22.4)	58 (2.7)	677 (31.6)
1980	5,405 (37.0)	2,836 (19.5)	38 (6.6)	324 (59.4)
1985	13,840 (58.9)	2,140 (9.1)	264 (14.7)	1,144 (63.8)

資料：東京中央卸売市場年報による

使われていた比較的平坦な畑や緩やかな丘陵地が広く分布していた。腐植性火山灰土壌からなる洪積台地の普通畑や桑園が、スイカ畑に転用されたのである。また、生理学的にも昼夜の寒暖の差のある東北日本では水稲生産力の上昇にみられるように⁸⁾ 糖度の乗った良質のスイカが生産しうる地域なのである。

b) 農協の共販体制と任意組合

農家で収穫されたスイカは、農業協同組合の支所ごとにある共同選果場に運ばれ、等級付けられる。この共選されたスイカは、農協と契約された運送会社の10トン積みトラックで大都市市場に出荷される。現在、尾花沢市農業協同組合の共販率は54%弱である。一般に、10トン車には13kg 1箱のスイカ700箱を積みこむ。この量は共選されるスイカが10a300本植えられ、1本のスイカの木から2-3個(1箱分)収穫されるのであるから、ほぼ23aのスイカ栽培面積に相当する。なお、東京市場に出荷する場合、トラックは国道13号線・4号線を夜間走るので、高速道路を通ることはない。

スイカは、現在東京市場ばかりでなく、関西、東北地方にも出荷される。東京市場においてスイカの銘柄が確立すると、それを求めて多くの市場から引き合いがくるからである。良質のものを求める点では一致するが、市場によつて若干の嗜好

の差がある。東京市場においては上質の普通玉スイカが好まれる。これに対し名古屋、大阪、京都などの関西市場では、大玉を求める傾向がある。これは、婦恋のキャベツの包装にも通用するもので、スイカの場合、東京市場では1箱3個、関西市場では1箱2個を意味する。一方、東北地方においてはスイカの切売りが行われないため、市場では形が劣っていても1個売りが好まれる。また、静岡・山梨両県では小玉のスイカが求められる傾向があるという⁹⁾。

しかし、このような農業協同組合の共販体制に参入しない多くのスイカ出荷組合がある。任意組合が多いのは、同じスイカ苗木を使っても栽培技術の差によってスイカの品質に個人差が大きいつくからである。任意組合は、荏原、浦和など大都市周辺市場をはじめ、それぞれいくつかの市場と出荷量を取り決め、いわばスイカの半契約栽培を行っている。任意組合を組織する農家はどちらかといえばスイカ栽培の経験も長く、良質のスイカを生産していると自負している者が多い。

III - 2. 栽培技術の進展

a) スイカ接木苗の採用と生産

かつてスイカはどの地域でも自家採種し、その種子を植えたものである。すなわち、農家の畑でとれた最上のスイカの果実から種子を採り、翌年それを畑に直播してその成長にまかせる、いわば放任栽培であった。当時、スイカは開墾地や荒地など土地の痩せたところで良くできるといわれた。これは、肥沃な畑や同じ畑では病気が発生しやすく、忌地現象が生じることを示したものである。しかし、スイカの商品生産のためには忌地を回避することが不可欠となる。さもなければ、スイカ栽培の規模拡大が困難だからである。この問題を解決したのが、スイカの接木苗ということができよう。

スイカの接木苗は、スイカの幼苗の芽をユーガオ、カボチャ、トウガンの幼苗を台木としてその芽の部分に接木したものをいう。一般に、台木はスイカの播種一週間前に播種される。スイカの播

種10日後、スイカは台木に接木される¹⁰⁾。現在、スイカや台木の種子は専門業者によって供給される。すなわち、種子は奈良の大和農園、荻原農場産である。前者が縞王マックス、後者が日章、富士光を供給するので、本地域で栽培されるスイカの品種が統一される結果となる。しかし、この接木苗を使っても連作障害を完全に除去できない。カボチャ台に発生する急性萎ちょう症は、その例であり、年によってユーガオ、トウガン、共台（野生のスイカ）、カボチャなど台木を代える農家もある。そこで、種苗業者は台木の品種も更新している。ドンケイ、タフガイなどはその例である。

スイカ接木苗の導入により本地域の作型が早まった。山形市や天童市で育苗された接木苗を使うと、根雪期間が104日に及ぶ多雪地帯の本地域で4月中旬の雪解けとともに定植できるからである。しかし、前述のように尾花沢地区でもスイカを育苗するようになった。現在、尾花沢市農業協同組合とともにスイカ苗を育苗して販売する農家は尾花沢市内だけで20軒あり、そのうち4軒は1戸当たり10万本の苗を生産しているという¹¹⁾。

b) 作型の多様化と連作障害の克服

尾花沢地区においてスイカは現在、3つの作型で栽培されている。大型トンネル、中型トンネルおよびトンネル密閉栽培である。トンネル内で着果する大型トンネル栽培は、愛知県で屈んで作業する背丈の低いビニール・ハウスをベトコン栽培と俗称されるのに因み、それより小さいのでラオス栽培と俗称される。一方、中型トンネルは、裾開き栽培あるいは蔓引き栽培とよばれる。この両者は、共にスイカを1株から2-3個収穫する本地域の前進栽培で、前者が7月20日、後者が7月25日頃から収穫される。最も普遍的な栽培形態が省力型のトンネル密閉の多蔓栽培である。1株から5-6個8月が中心であるが、9月10日頃まで収穫される場合がある。一般にスイカは盆までが勝負といわれるが、残暑が続くとこの作型でも良い価格が享受できる。

いづれの作型においても水稻の収穫、脱穀、調整の終わった10月中旬-11月上旬の秋にマルチン

グされる。この秋マルチは、雪解け時に地温を早く上昇させ、春の労働力競合を避けるため実施される。この際、数年に一度の割合で深耕し、またマルチングする定植畝の場所を替える。これも連作障害を克服する一つの方法である。

前述のようにスイカの接木苗の採用も連作障害を克服する一つの手段であるが、尾花沢地区では他にいくつものその試みがなされている。その1つはスイカ畑の圃場を年毎に代えることであるが、これは1農家1haものスイカを栽培する主産地にあっては経営耕地が広いといっても不可能である。スイカの収穫後、ライ麦を清掃作物（クリーニング・クロップ）として輪作体系に取り入れることも、本多雪地域では一部実施されているにすぎない。簡単にできることはスイカ畑から病苗を除去することで、実施率も高い。収穫後の残滓を残さないことも重要な連作障害を克服する手段であるが、手間がかかるのでトラクターで鋤込んでしまうことが多い。

連作障害を弱める有効な手段は有機質肥料の投入である。雑穀を栽培していた時代には役牛馬が飼育されていたので、畑地に十分な堆厩肥が投入されていた。しかし、耕耘機・トラクターの普及およびスイカ栽培面積の拡大とともに家畜が飼育されなくなった。現在、堆厩肥は水稻の藁および籾殻との交換あるいは生堆肥2トン車1台6,000-7,000円で酪農家や肥育牛農家から供給され、畑に投入されている。1,000頭を肥育する畜産家および尾花沢市農業協同組合直営の牧場・畜舎が主要な堆肥の供給源である。

IV スイカ生産地の農業構造

IV-1. 尾花沢地区におけるスイカ栽培の地域的展開

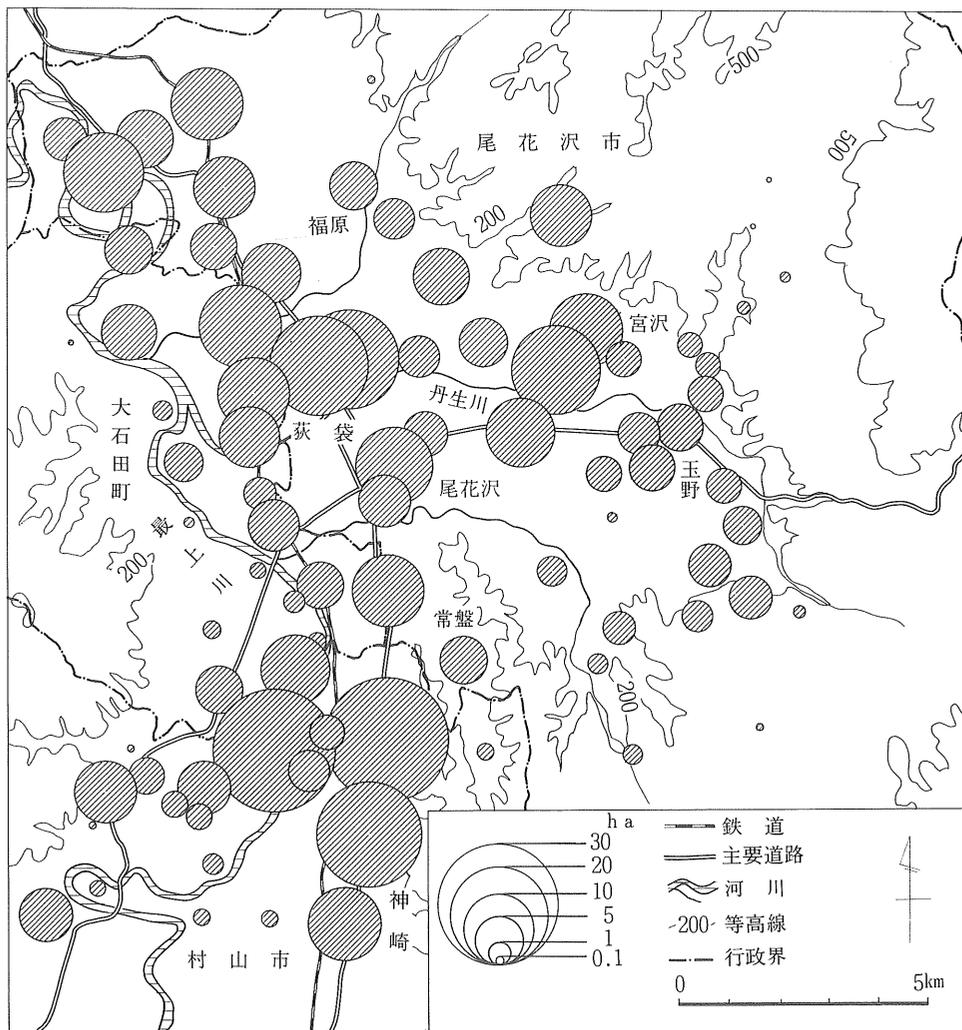
戦後、尾花沢地区のスイカ栽培は、前述のように荻袋開拓で始まり、荻袋集落、福原地区、次いで尾花沢市、さらには大石田町、村山市へと波及した。しかし、尾花沢地区の農業集落にスイカ栽培が一樣に取り入れられたわけではない。集落の置かれた自然・社会環境によって農業の複合経営

に地域差があるからである。すなわち、スイカは全体的にみるとまず、水稻+雑穀地域で導入されついで水稻+養蚕地域に波及したが、水稻単作地域では栽培されにくかった。

ここで尾花沢地区におけるスイカの集落別栽培面積を1985年農業センサス結果報告によつてみたのが、第3図である。それによると尾花沢市の萩袋、萩袋開拓を中心に西野々、尾花沢新町、横内、村山市の土生田、本飯田、金谷など国道13号線に沿う集落でスイカの栽培面積が多いことがわかる。

もちろん、栽培面積は母集団となる集落の農家数によって左右されるので、村山市のそれは農家数が多いためであるが、全体の傾向は把握しうる。また、正巖、丹生、午房野および大石田町の新山寺など国道13号線から離れたところでスイカ栽培面積が多いのは、農用開発事業によって丘陵地が開畑され、畑地の増反がなされた集落および水田転作でスイカが栽培された集落である。

また、とくにスイカの栽培面積が少ないのは、最上川の支流丹生川、臈気川および丹生川の支流



第3図：尾花沢地区における集落別スイカ栽培面積の分布
資料：1985年農業センサス集落別集計表（尾花沢市、村山市、大石田町）

赤井川などに沿う上流集落である。これらの集落では農地が沖積地の水田に限られるためである。ちなみに尾花沢市農業協同組合の1985年営農改善計画書によれば水稲＋スイカに野菜を加えた経営は20%だけであるが、水稲単作経営は全農家47.4%に上っている。だから、旧宮沢、玉野、常盤村の河川の上流にある集落では水稲単作経営が多い。また、標高200m以上の地域でスイカが栽培されると、ヤマセの影響を受け、着果不良に陥ることがある¹²⁾が、好天に恵まれると良質の遅出しスイカの産地になる。一方、最上川左岸の村山市域でスイカ栽培が少ないのは、そこがサクランボ・リンゴなどの商品作物が導入されているからである。

IV - 2. 荻袋集落の土地利用

第4図はスイカの核心集落である荻袋の土地利用を示したものである。土地利用調査は1986年6月28・29日に実施した。調査の便宜上、調査範囲の西縁を1985年12月開通したバイパスまでとしたが、この範囲には、国道13号線に沿う路村荻袋とかつて陸軍演習地であった国道の東側に入植した荻袋開拓の一部が含まれる。現在、前者は1、2、3区128戸、後者は47戸の世帯からなる。農業集落のなかにも非農業施設が混在しているという意味で公共施設や商店・自動車修理工場等を区別した。土地利用図によれば、水稲が最も卓越していることが判る。その水田も丹生川に沿う沖積地では、早くから開かれていたが、そこと5mの段丘崖で境をなす洪積台地では浅い谷地田を除き、水田はすべて1964年に地下水を汲上げ、開田されたものである。

スイカは水稲につき、畑地では最大の面積を占め、スイカ栽培の核心地区であることがわかる。野菜類には奨励作物であるカボチャ・アスパラガスに加え、ヤマイモ・バレイショおよびナス、フキなどの菜園も含めた。スイカに先行する伝統作物として陸稲およびダイズ・アズキ・インゲンなどの豆類がみられたが、生食用トウモロコシ（ハニー・バンダム）も豆類に含めた。また、スイカに先行する商品作物としてタバコ・ポップおよび

加工トマトが比較的広範囲にみとめられたが、これらは一括して工芸作物とした。一方、本地域には山形県を代表するサクランボ（散在する）・リンゴ・ブドウなどの果樹園はみられなかつたが、桑・柿の果樹園が1ヶ所づつみられたほか、タラノメの促成栽培のための台木を仕立てるタラノキ栽培圃が数ヶ所みとめられた。これらは、一括して樹木作物とした。1986年10月には売れ残ったスイカの果実が畑に残存していたが、11月上旬には秋マルチがかけられていた。スイカの後作に農協との契約栽培で午房野カブ系¹³⁾本沢カブ（日野菜系赤カブ）が一部みられたが、大部分の畑は一毛作であった。また、家庭菜園にはダイコン、キャベツ、ハクサイもみとめられた。

土地利用においてスイカが卓越しているとはいえ各種作物がこのように混在している様相は、モノカルチャー的な九州の植木スイカや三浦スイカの産地¹⁴⁾と異なる本地域の特色といえよう。このことは、杉が段丘崖ばかりでなく、台地面にも平地林および防風・防雪林として残存していること、村山営林署尾花沢分場の山林苗木圃の存在と重なり、本地域が土地に余裕のある東北型のスイカ産地であることを示すものといえよう。

IV - 3 荻袋集落の農業経営

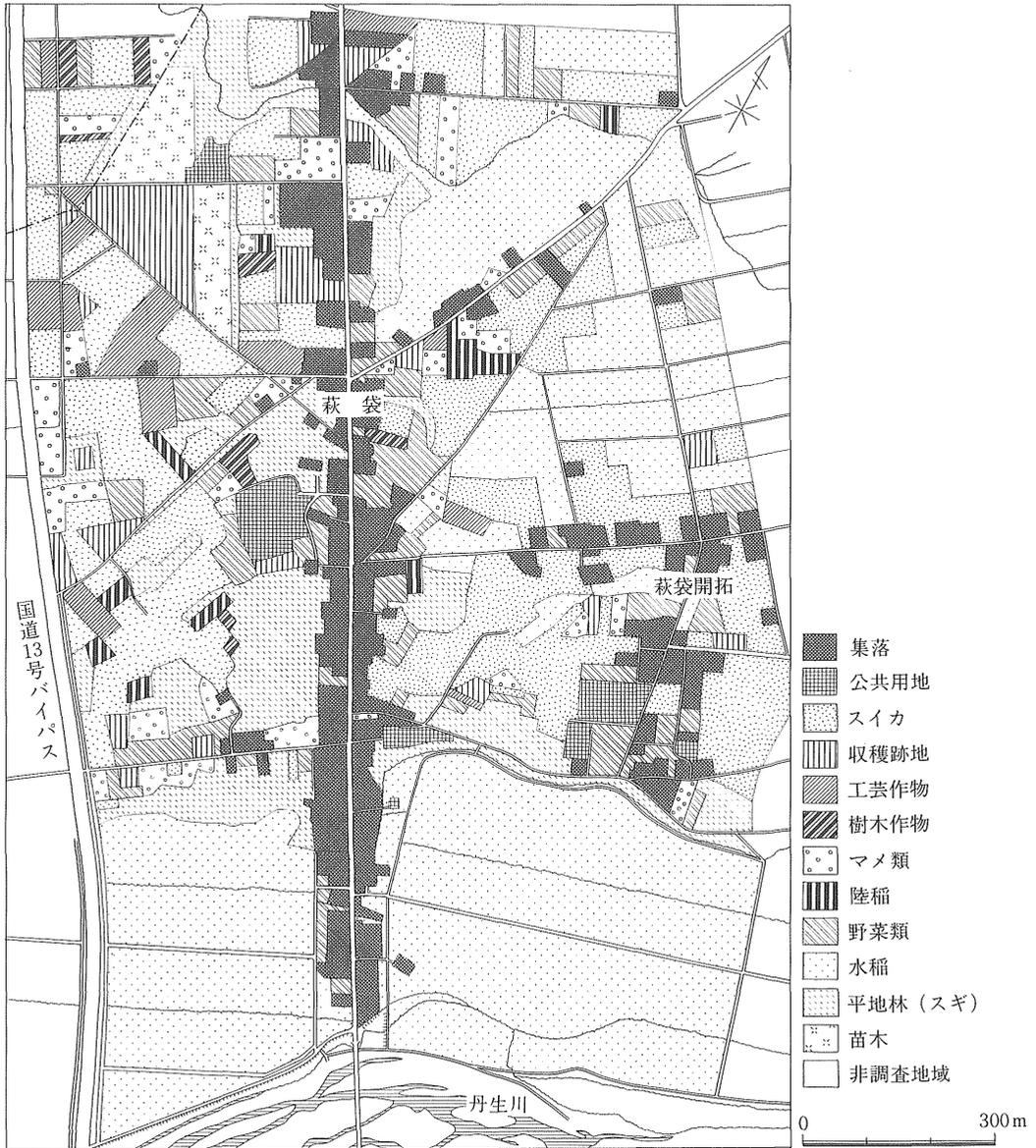
a) 旧開拓地農家の農業経営

1945年に山形連隊の陸軍演習地に入植した荻袋開拓は、開拓地営農実績調査によれば、1960年において52戸の専業農家が9haの田と、146.9の畑を活用し、陸稲42.8ha、菜種23.8ha、飼料用トウモロコシ10.2haおよび蔬菜23.8ha、を栽培し、役牛47頭、乳牛39頭を飼育する開拓地であった¹⁵⁾。菜種は秋に定植され、雪の下で冬を過ごし雪解けとともに成長し初夏に収穫された。つまり、畑地では一般的に陸稲－菜種－蕎麦－大豆（小豆）という3年4作の雑穀中心の作付体系が採られていたのである。ところが、1964年に地下水を揚水し、50haの開田に成功したため1965年には水稲が農業経営の第1位部門となった。それまで、稲は自給用に谷地を利用して栽培されていたに過

ぎない。この開拓地は、多くの戦後開拓地同様、雑穀と畜産が営農目標とされたので、県農地開拓課は当初この開田計画に賛成しなかったが、自給用に認可された水田が、50haに達したものであるという。しかし、この開田によって開拓地の営農は安定し、スイカ栽培に専心できるようになった

といえるだろう。

開拓地営農実績調査にスイカが表れるのは1966年のことであるが、スイカは入植当初から1反歩程度栽培されてきた。しかし、雑穀に加え、販路の安定したタバコ、ホップなどの工芸作物も栽培されたので、スイカが卓越することはなかった。



第4図：尾花沢市萩袋の土地利用
現地調査(1986年6月28、29日)による

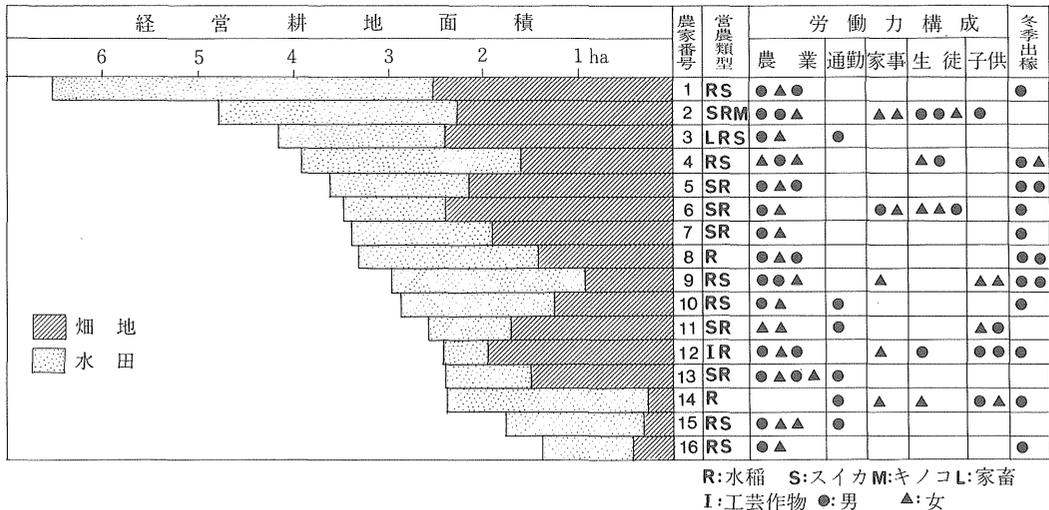
ところが、国道13号線脇での振り売りによりスイカ産地が知れわたり、県外の青果業者が入ってくるようになった。すなわち、スイカは雑穀や工芸作物よりスイカの反収が良くなったので、比較的多く栽培されるようになったのである。もちろん、スイカ栽培面積が卓越するようになったのは、前述のように接木苗の導入、栽培技術の向上など農民の不断の努力があったからである。当時、スイカの収穫期には畑に見張り小屋までできたという。¹⁶⁾

第5図は土地利用図に入っている旧荻袋開拓の農家の土地所有および労働力構成を示したものである。それによると、この40年間に当初配分の3haから大きく懸け離れた土地所有になっていることがわかる。農家数が最大56戸から47戸に変わったように、概して大きくなったといえる。しかし、病人のいる農家を除き、全ての農家が水稻+スイカの経営形態であることでは共通している。その上、少なくとも二人以上の農業労働力を擁し、多くの農家が二世代にわたる労働力を持っていることは、農業に対する意欲が大きいことを示している。経営規模が2.5haを越える農家でも出稼ぎ者がいるのは多雪地帯である本地域の特性を示すもの

であり、農業への取り組みの弱さを示すものではない。また、出稼ぎをしない農家番号2・3の農家はそれぞれ冬季にスイカの接木苗を生産する農家と肥育牛農家である。前者はスイカ苗を10万本生産し、自家の2haのスイカ畑ばかりでなく、同じスイカ出荷組合員や希望者に販売している。農業労働力は3人であるので、収穫期にアルバイトを3人雇っている。また、スイカの育苗ハウスで万年茸（霊芝）を栽培しているのも重要な収入源となっている。

b) 既成集落の農業経営

路村状の荻袋集落では台地上の農家でも水田を戦前から所有あるいは小作し、水稻を栽培していたところが開拓集落と大きく異なる点である。この集落では戦前からスイカを栽培し、八百屋に販売していたという。もちろん、直播きスイカであったので、面積は限られていた。したがって、畑作の主体は陸稲、大豆、菜種などの栽培にあった。大豆は1年おきに作られたので、陸稲-大豆-菜種-そば-大豆という4年5作の作付体系が一般的であった。収穫された陸稲は、政府米として、大豆・菜種は業者に販売された。



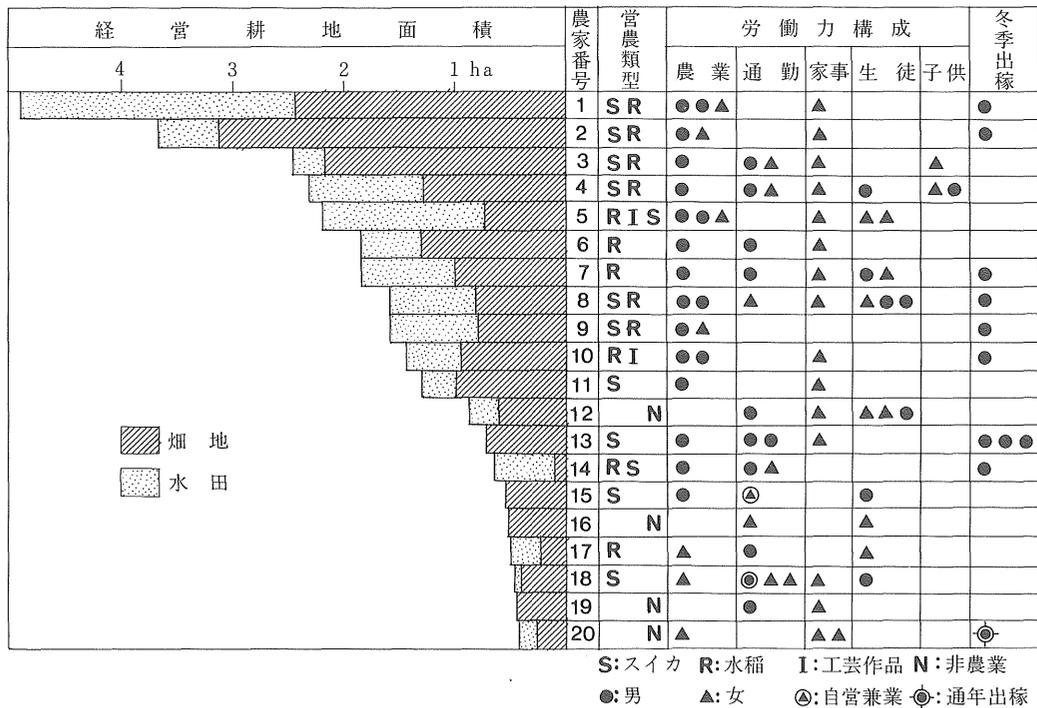
第5図：尾花沢市荻袋開拓農家の経営耕地と労働力構成
尾花沢市役所農業委員会、住民課資料および
聞き取り（1986年11月6日）による

荻袋開拓のスイカ栽培の成功に刺激されて既成の荻袋集落でもスイカを積極的に栽培するようになった。しかも、この集落は国道13号線に沿った路村であるので、国道脇に簡易小屋を建て、スイカの直売を行ったところに特色がある。かつて、尾花沢市だけで60ものスイカ直売店があったが、現在では規模の大きい10店舗位に減ってしまった。当初スイカの直売店は大きな利益をあげたが、大規模にスイカを栽培する農家は労働力競合のため直売店から手を引くようになった。これは一つにはスイカが一般化し、直売のメリットが失われたためでもある。

スイカの収穫期には県内はもちろん、仙台や青森の青果業者が入り込み、スイカを庭先で買っていったという。このため、現在でもこの集落のスイカ系統出荷率は低い。しかし、共販は行っている。たとえば、第6図の3番農家は、仲間10人と

丸荻スイカ生産組合を組織し、東京の荏原、神奈川の小田原青果市場と特約協定を結んでいる。この生産組合はこのような特約市場の他、質の劣るスイカを仙台市場に出荷している¹⁷⁾。

第6図は既成集落の経営耕地と労働力構成をみるため、荻袋第三区の約半数の農家を取り上げたものである。それによると営農形態は旧開拓地同様、水稲+スイカが最も多く、スイカ栽培の核心集落であることがわかる。ただ、農業専従者がいるのは1戸のみで、世帯主あるいは後継者およびその妻が勤めている農家が多いのが特徴的である。1960年代後半および1970年代前半にほとんど全ての農家が出稼ぎに出ていることを考えると、低成長期に出稼ぎ者が恒常的通勤兼業者に変わったとみることができる。開拓地と異なるもう一つの点は、農地の賃貸が多いことである。畑地を持ちながら営農形態に水稲しか表れないのは、家族の病



第6図：尾花沢市荻袋既成農家の経営耕地と労働力構成
 尾花沢市役所農業委員会、住民課資料および
 聞き取り（1986年11月6日）による

気や労働力構成から畑を相対または農協を通じて他人に貸しているからである。

V むすび

1) 本地域におけるスイカの小商品生産は、1925年頃から行われてきたが、農業の中心は水稲、養蚕、雑穀生産に置かれてきた。戦後、腐植性火山灰(黒ぼく)土壌からなる洪積台地に多くの開拓地が開かれ、陸稲、大豆、菜種、蕎麦等の雑穀生産のかたわらスイカが栽培され、地元および県外の青果業者に販売された。

2) 戦後開拓地で始まったスイカの商品生産は、1957年接木苗の導入によって既成集落に、ついで尾花沢市から大石田町、村山市へと波及し、スイカの栽培面積が大幅に増加した。当初、スイカの接木苗は、山形市、天童市から導入された。これは、積雪2m、根雪期間が12月中旬から4月中旬まで104日に上る多雪地帯においてスイカの栽培期間を短縮するものであった。しかし、1971年から尾花沢市農協もスイカ接木苗を育苗・販売するようになり、次第に地元の農家も育苗ビニール・ハウスを設置し接木苗を生産するようになった。尾花沢地区のスイカ栽培の発展により山形県におけるスイカの産地は庄内砂丘から内陸盆地へ移った。

3) 忌地現象を回避するためのスイカ接木苗の普

及はスイカの品種統一を促し、産地形成に大きく寄与した。もっとも、富研、綺王、綺王マックス、日章、富士光等のスイカの種子とカボチャ、ユーガオ、トウガン等の台木種子は、奈良の大和農園、荻原農場などの業者から購入される。

4) 農業協同組合は、接木苗の配布、技術指導、協同販売等を通じ栽培面積を広め、「花笠西瓜」「べにばな西瓜」「基点西瓜」という尾花沢スイカの産地形成を図ってきた。しかし、スイカの共販率は50%前後で、依然として多数の任意団体のスイカ生産組合が各地の青果市場と特約販売している。

5) スイカ栽培の先進地である荻袋集落の土地利用調査を実施した結果、スイカが水稲とともに卓越していることが判明した。また、旧開拓地では、2世帯にわたる農業労働力を擁し1~2haのスイカを栽培することによって水稲+スイカの複合経営を行っているが、スイカの接木苗生産、牛の肥育農家を除き、冬季出稼ぎを行って農業経営の安定を計っている。一方、1ha前後のスイカを栽培している荻袋でも、かつて広範な出稼ぎが行われたが、現在では多くの基幹労働力が恒常的通勤兼業に従事するようになった。ここにも1毛作を基本とした多雪地帯の、いわば東北型のスイカ産地の特色がみられる。

本稿の作成にあたり、山形県農林部、尾花沢市役所企画課、尾花沢市農業協同組合、尾花沢農業改良普及所の野菜担当者およびスイカ栽培農家の方々からご協力を賜った。また、調査の一部に文部省科学研究費一般研究C (No. 60580184 代表者 奥野隆史, No. 60580186 代表者 佐々木博, No. 61580199 代表者 斎藤功) の一部を使用した。製図は本学の宮坂和人、尾崎二郎氏にお願いした。以上、記して感謝いたします。

【注および参考文献】

- 1) 1985年の東京卸売市場年報による。詳しくは平尾正之(1983): すいかなの大規模産地の問題. 鈴木忠和編著「野菜経済の大規模化」楽遊書房, 156~179を参照のこと。
- 2) 松井貞雄(1981): 熊本県, 植木スイカの産地形成. 地理学報告, 52・53, 1~16.
- 3) 斎藤 功(1984): プナ帯における夏野菜栽培の発展. 「日本のプナ帯文化」(市川・山本・斎藤編) 朝倉書店, 150~164.
- 4) 尾花沢農業改良普及所(1980): すいかなの栽培—その発展過程と現状— 5p.
- 5) 尾花沢農業改良普及所(1980): 新山寺のすいか. 9p. なお, 山形統計情報事務所村山支所(1986)

：尾花沢のスイカ32p. は上記二つのパンフレットに尾花沢市農業協同組合の資料を編めたものである。

- 6) 坂本英夫 (1973) : 庄内平野北部の海岸砂丘地における農業の変化, 地理学評論, **46**, 778~794.
- 7) 齋藤叶吉 (1957) : 山形県における桑園分布の変化, 地理学評論, **30**, 1030~1042.
- 8) 田林 明 (1983) : ブナ帯における稲作の発展, 人文地理学研究, **8**, 233~256.
- 9) 尾花沢市農業協同組合営農部長有地静雄氏の談話 (1985年6月28日) による。
- 10) 尾花沢市農業協同組合 (1985) : 昭和61年度 共販西瓜栽培管理標準, 50p.
- 11) 尾花沢市荻袋開拓齋藤 寛氏からの聞き取り (1986年11月6日) による。
- 12) 尾花沢市農業協同組合営農部長有地静雄氏の談話 (1986年11月5日) による。
- 13) 青葉 高 (1976) : 「北国の野菜風土誌」東北出版企画, 170~190.
- 14) 齋藤 功・渋沢文隆・池田一雄 (1985) : 三浦半島における野菜生産の発展と農業経営, 人文地理学研究, **9**, 95~124.
- 15) 山形県農地開拓課 (1961~1970) : 開拓地営農実績調査報告による。
- 16) 尾花沢市荻袋開拓齋藤富士男氏からの聞き取り (1986年11月6日) による。
- 17) 尾花沢市荻袋結城信之氏からの聞き取り (1986年11月6日) による。